

平成13年度全国教育研究所連盟「教育課題等」研究協議会【北海道十勝大会】

**言語障害通級指導教室、言語障害特殊学級における
言語発達に遅れのある児童の指導の改善・充実に関する研究**

～実態調査と連携に焦点を当てて～

北海道立特殊教育センター
教育課聴覚・言語障害教育室

高嶋 利次郎

2001・11・15～16

研究の目的

本道の言語障害通級指導教室、言語障害特殊学級における言語発達の遅れに関する指導の現状と課題を考察するとともに、言語発達に遅れのある児童の指導の改善・充実に資するために、実態把握の方法、指導内容・方法の設定及び関係者間の連携の在り方について検討する。

1 実態調査の結果から

本道の言語発達に遅れのある児童生徒の教育の現状と課題を把握するため、本道の小学校、中学校における言語障害通級指導教室設置校、言語障害特殊学級設置校を対象として実態調査を行った。調査の実施は平成12年3月であり、対象校は122校（言語障害通級指導教室設置校64校、言語障害特殊学級設置校58校）である。

回収率 82.8%（〔言語障害通級指導教室設置校59校、言語障害特殊学級設置校42校〕101校/122校）
有効回収率 84.3%（〔言語障害通級指導教室設置校51校、言語障害特殊学級設置校40校〕91校/108校）^{注1)}

(1) 調査の結果

ア 児童生徒の実態

児童生徒の実態

言語発達に遅れがあるとの回答を得た児童生徒数は981名である。言語障害通級指導教室において通級による指導を受けている児童生徒数は781名であり、そのうち自校通級の児童生徒数は216名、他校通級の児童生徒数は565名である。また、言語障害特殊学級において、指導を受けている児童生徒数は200名である。

学年別の傾向では、小学校1・2年の児童数は484名（49.3%）、3・4年の児童数は299名（30.5%）である。1～4年の児童数は783名であり、全体の79.8%を占めている。

イ 指導上の課題

指導上の課題

指導上の課題については表1に示した。「通級指導の場で身に付けた行動、能力、態度などを児童生徒が通常の学級で発揮することが難しい」は62.6%、

表1 指導上の課題 (N=91) <複数選択>

選択項目	%
・通級指導の場で身に付けた行動、能力、態度などを児童生徒が通常の学級で発揮することが難しい	62.6
・適切な指導課題の設定が難しい	57.1
・指導についての評価の進め方が難しい	47.3
・実態に合った指導内容・方法でないと感じることがある	42.9
・適切な教材・教具がない	19.6
・その他	4.4

注1) 有効回収率は調査票の返送や電話によって、言語発達に遅れのある児童生徒が、通級あるいは在籍していないと回答した学校を除いた分析対象校108校に基づく。

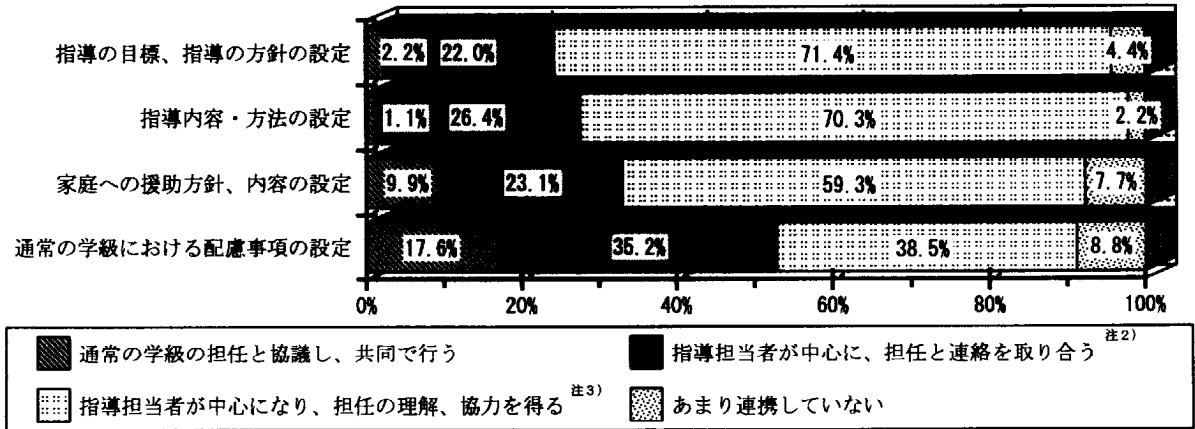
「適切な指導課題の設定が難しい」は57.1%、「指導についての評価の進め方が難しい」は47.3%、「実態に合った指導内容・方法でないと感じる事があ
る」は42.9%である。

ウ 通常の学級との連携

(7) 指導計画の作成における通常の学級の担任との連携

担任との連携

指導計画の作成の際に、通常の学級の担任とどのように連携を図っているかについて図1に示した。「指導の目標、指導の方針」、「指導内容・方法」及び「家庭への援助方針、内容」の設定は通級担当者が中心となってい、通常の学級の担任には、その説明や資料送付などを行い、理解、協力を得ていることが主である。「通常の学級における配慮事項の設定」は、担任と連絡を取り合いその要望や条件を十分取り入れて行うことが35.2%であり、指導担当者が中心になり、担任の理解、協力を得る（38.5%）とほぼ同程度である。



(N=91) <1肢選択>

図1 指導計画作成における通常の学級の担任との連携

(4) 通常の学級の担任からの情報収集と説明の状況

在籍学級の担任からの情報収集等

通常の学級の担任からの情報収集と説明の状況については、図2に示した。図2の「情報収集の状況」は、通常の学級における児童生徒の指導の様子に関する情報収集の状況を示す。「説明の状況」は、通級による指導における児童生徒の指導の様子、家庭への援助の状況及び個別の指導計画の実施状況に関する通常の学級の担任への説明、協議の状況を示す。いずれも回答校の半数以上が良好な状況であると認識している。在籍学級の担任との連携で特に重視している方法としては、「電話」(26.4%)、「指導報告書」(19.8%)、「在籍学級の授業参観と懇談」(15.4%)、「手紙など文書による連携」(13.2%)、「通級指導教室での懇談」(11.0%)の順に多く挙げられた。

注2) 言語障害通級指導教室、言語障害特殊学級の指導担当者が中心となってい、在籍学級の担任と連絡を取り合い、その要望や条件を十分に取り入れて行う。
注3) 言語障害通級指導教室、言語障害特殊学級の指導担当者が中心となってい、在籍学級の担任にはその説明を行ったり、資料を送付するなどして、理解・協力を得ている。

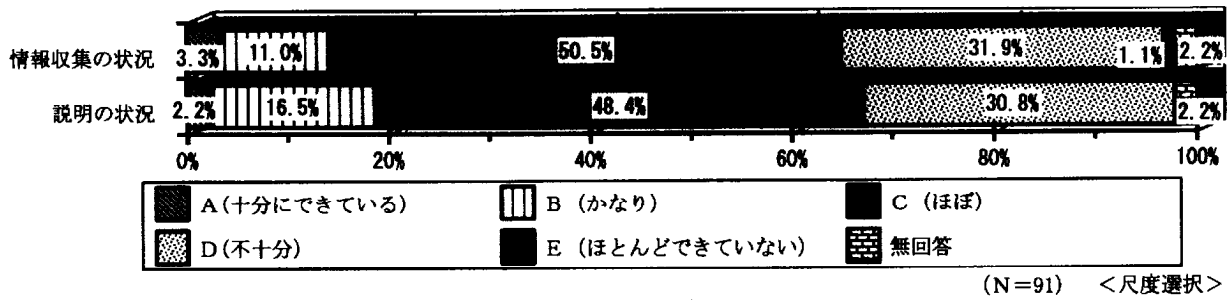


図2 情報収集と説明の状況

(f) 通常の学級の担任の理解と協力

担任の理解と協力

通常の学級の担任の理解と協力の程度については図3に示した。「十分にできている」、「かなりできている」、「ほぼできている」を合わせると、「通級、特学の教育内容の理解」は65.9%、「通級児童生徒の理解」は81.3%、「通級、特学への協力意識」は83.5%である。

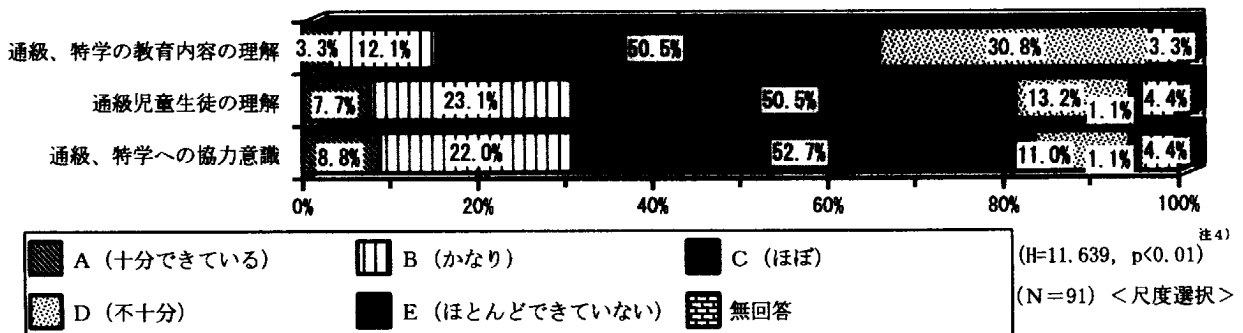


図3 通常の学級の担任の理解と協力

(2) 調査結果のまとめと考察

ア 児童生徒の状況

児童生徒の状況

本道の言語障害通級指導教室、言語障害特殊学級において、指導を受けている言語発達に遅れのある児童は、小学校1～4年の低学年に多い。そのため、就学の時点において、児童への教育的対応を迅速に行うことや早期教育相談機関との連携が求められる。他校通級の児童生徒数は全体の63.7%であり、通常の学級の担任から児童の実態に関する情報を収集する場合や指導を行う際の関係者との連携を図る上では、自校通級の児童の学級担任に比べて、その進め方の工夫や配慮が必要となる。また、知的障害、自閉的傾向、学習障害など多様な状態像の児童生徒が通級している状況が報告されていることもあり^{1・2)}、児童の状態像に応じ、一人一人の児童の実態を様々な側面からの確にとらえることが求められる。

イ 通常の学級との連携

担任との連携

通常の学級の担任の「通級、特学の教育内容の理解」、「通級児童生徒の理解」及び「通級、特学への協力意識」に関して、通級担当者はこの三者間で異なる評価をしているが、通級担当者が通常の学級の担任と密接な連携を図って

注4) 3グループ間の有意差を検定するクラスカル・ウォリス検定であり、「通級、特学の教育内容の理解」、「通級児童生徒の理解」、「通級、特学への協力意識」の三者間に1%水準の有意差がある。

いる様子がうかがえる。

しかし、指導上の課題として、「通級指導の場で身に付けた行動、能力、態度などを児童生徒が通常の学級で発揮することが難しい」を挙げている回答校は62.7%である。このことについては、指導の場によって個別指導、集団指導のように指導形態が異なることや関係者の協力体制が十分取られていないことなど様々な要素が考えられる。

現在の通常の学級との連携は、通級担当者が中心となって進められることが多いが、児童の指導、援助にかかわる通級担当者、通常の学級の担任は、個別指導から集団指導への移行を見通して、自立活動を中心とした指導内容・方法の通常の学級での指導への応用も含め、指導内容・方法を検討し、相互に協力して児童の指導、援助に当たることが大切である。また、このことについては、保護者の理解と協力も不可欠な要素である。

そこで、従来の通級担当者が中心となる連携から一歩進んで、双方向の協力関係の形成という視点から、個別の指導計画の作成と実施における、関係者の連携の在り方を検討する必要があると考える。

2 課題解決の方策の検討

実態調査の結果から、連携に関しては、双方向の協力関係の形成という視点からの連携の在り方を検討することの必要性が考察された。

課題解決の方策

そこで、このような課題解決の方策として、関係者双方にとって実効性のある協力体制の形成の在り方を検討することにした。

このことについては、関係者が援助チームを形成し、言語発達に遅れのある児童の指導、援助にチームとして取り組むことをとおして、実効性のある協力体制の形成を図る方策について検討する。

(1) チームアプローチに基づいた、協力体制の形成

ア チームアプローチ

チームアプローチ

言語障害通級指導教室、言語障害特殊学級における指導によって身に付いた行動や態度などが、通常の学級や家庭においても発揮しやすくなるためには、チームアプローチの観点に基づいて、個別指導から集団指導への移行を見通した指導、援助を行うことが大切である。通級による指導を受けている児童に対しては、通常の学級の担任と通級担当者が指導に当たる。このことは、広義のチームティーチングととらえることもでき、関係者が連携を図ってチームで取り組むチームアプローチとしての観点が必要となる。

チームアプローチでは、通級担当者が通常の学級の担任、保護者等と援助チームを編成して、児童の実態の確認と今後の指導、援助の計画について協議し連携を図る。この協議、連携の場が、いわゆるコンサルテーション会議に発展することも効果的である。

コンサルテーション

コンサルテーションとは、異なった専門性や役割をもつ者同士がそれぞれの専門性や役割に基づき、特定の援助対象児の問題状況と援助の実状について検

討し、今後の援助の在り方について話し合うプロセスであり、そのための会議はコンサルテーション会議と呼ばれている（石隈，2000）。

イ 実践事例による検討

(7) コンサルテーション会議の開催に至る経緯、目的及び手続き

開催に至る経緯

事例は他校通級児童であり、同じ学級の他の児童と関わりたいという気持が攻撃的な行動となって現れ、通常の学級においてどのように本児に対して指導、援助を行うことが望ましいか課題となっていた。本児は医療機関に定期的に通院し、中枢神経刺激剤を服用するとともに、作業療法士の指導を受け、併せて通級指導教室にも週1回通級している。しかし、関係者間の人的なつながりやネットワークは形成されておらず、保護者が各関係機関の情報を伝える状況にあった。

コンサルテーション会議の開催

そこで、本児が抱えている課題の解決及び事例1の課題として残された連携に関する課題解決のために、通級担当者、保護者、通常の学級の担任等、医療機関の学校心理士、作業療法士等が援助チームを構成し、コンサルテーション会議を行った。会議においては、児童の実態の確認と今後の指導、援助の方策について話し合い連携を図った。

実践に当たり、次のような手続きを経て、会議を開催した。

- コンサルテーション会議の趣旨、会議における協議を進める上でのルール、司会の要領、援助チームシートの検討、会議運営上の留意事項などについて考え方の整理
- 会議の開催計画に関する研究協力校との協議
- 参加者に対して通級指導教室設置校長名の依頼文書を作成、送付
なお、援助チームシートを事前に記入するように依頼した。

コンサルテーション会議は従来から言語障害教育において行われてきたケース会議の要素と、在籍校訪問として行われる連携関係の形成の要素、保護者との懇談の要素をもっており、学校心理学や個別教育計画（IEP）の考え方に基づいて、本研究では言語障害教育における位置付けについて検討した。

(イ) ティームアプローチに基づき、協力体制の形成を図った事例

【援助チームシート】(第 回) ～記入例～

児童名: () 年 月 日 () 小学校 年 組) 出席者名: (通級担当者、保護者、通常の学級の担任等、学校心理士、作業療法士、特殊教育センター) 実施日: 平成 年 月 日 () 時 分 ～ 時 分 (第 回)

	学 習 (学習状況、学習意欲等)	言語・運動 (ことばの理解や表現、上下肢の運動)	心理・社会 (情緒面、人間関係等)	生活・遊戯 (得意なことや趣味、将来の夢など)
① 子どものよさは?	<ul style="list-style-type: none"> ・大人が好きで人なつこい。明るく立ち直りが早い。 ・他の人がやる様子を注意深く見ていて、後で教えてくれる。お手伝いを好む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・通級指導教室では、興味のあることについて、通級担当者に尋ねてくれることが多い。 ・通級指導教室では、興味のあることについて、通級担当者に尋ねてくれることが多い。 ・通級指導教室では、興味のあることについて、通級担当者に尋ねてくれることが多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・他の女兒に対する攻撃的な行動がみられるが、中枢神経刺激の服薬や通常の学級の担任が本児を集団遊びに誘い、遊びの指導を行うことにより、攻撃的な行動は減り、同年齢の他の児童への関心が高まり、一緒に遊ぶことが増えてきた。 ・家庭では、今まで保護者が見える範囲内で遊ぶことが多かったが、本児の興味・関心や気持ちを察して受け止め、共感的な態度で接することを心がけてきたところ、外遊びや買い物などを一人で行えるようになった。 ・通級指導教室では、公務補さんになつたつもりで行う扉の施設や印刷など、本児が強い興味をもつ活動が社会的に受け入れられるように、通級教室での学習活動の工夫と校内の協力体制を整えた。 また、本児の要求が実現不可能な場合、理由の説明とともに本児の残念な気持ちを共有・共感するようになりしてきた。その結果、一定の活動の枠組みの中で活動できるようになりつづつあり、通級教室の通常の学級の児童も本児のよさを認める場面が増えてきた。また、通級指導教室に通うことがとても好きになり、通級日には在籍校での対人関係のトラブルがなくなってきた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭では歌が好きになり、兄弟で歌を歌って楽しむようになった。
② どのよう な働きかけでどこが伸びてきたか? (これまでどの援助と結果)	<ul style="list-style-type: none"> ・通常の学級では、本児が参加できる学習内容や学習活動の工夫を行ってきたところ、通常の学級の音楽の授業で指揮者役を務め、リズムに合わせて合唱を上手に指揮した。 ・通級指導教室や病院では本児の気持ちを大切に学習内容や学習時間を組み立ててきたところ、苦手なことでも取り組めるようになった。 ・通級指導教室では、お便り作りをおして書くことに慣れるようにしてきたところ、簡単な文章を書くことができるようになることともに、ワープロの使い方を覚え、お便りを作るようになった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・通級指導教室では、興味のあることについて、通級担当者に尋ねてくれることが多い。 ・通級指導教室では、興味のあることについて、通級担当者に尋ねてくれることが多い。 ・通級指導教室では、興味のあることについて、通級担当者に尋ねてくれることが多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭では歌が好きになり、兄弟で歌を歌って楽しむようになった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭では歌が好きになり、兄弟で歌を歌って楽しむようになった。
③ これから伸びて欲しいところはどうか?	<ul style="list-style-type: none"> ・本児の興味・関心や学力に応じた学習活動により、学習により一層意欲的になってほしい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えや思いを相手に伝え、相手とのやりとりを楽しみ、会話の内容や表現の仕方がより広がってほしい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・相手の気持ちや場の状況を理解し、同年齢の児童と望ましいいかかわり方をすることができるようになってほしい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・日常生活の中で本児が様々なことを計画し、行動して活動を楽しめるようになってほしい。

	学 習	言語・運動	心理・社会	生活・遊戯
④ どのような手だてがあるでしょうか？ ア 本児に働きかける上で役立つ本児のよさは何でしょうか？ イ 本児の学習や生活をより充実させる上で役立つ人、機関等には何が有り、どのように生かせるでしょうか？（その子とかわわり手が好きな事柄・事象）	ア 本児のよさ（自助資源） 繰次処理能力が高い。そのため、学習や計算などの手順を明示するなど繰次処理型の指導方略を用いることで、見通しを持って学習に取り組めるようになる。と考えられる。 イ 環境の援助資源 通常の学級の担任が学習活動の工夫に熱心であるとともに、通級指導教室と連携を積極的に図ってくれる。	ア 本児のよさ（自助資源） 話好きで、ごっこ遊びをとても好む。そのため、生活のある特定の場面や役割を設定した状態で、大人とのやりとりのある共同の活動が可能であり、ことばの指導を行いやすい。 イ 環境の援助資源 本児が進んで通級指導教室、身体機能や手指機能高めめる作業療法を行うことが可能な医療機関に通って指導を受けている。	ア 本児のよさ（自助資源） 物事の善悪の理解があり、素直に謝る。そのため、攻撃的な行動がみられた際の指導を受け止め、相手の気持ちを推し量ろうとする様子がみられる。 イ 環境の援助資源 通常の学級の担任や通級担当者、医療機関の学校心理士（心理療法士も兼ねる）、作業療法士が本児の行動改善のために、様々な分析や取組を行うことができる。	ア 本児のよさ（自助資源） 大人が行うことを自分もやりたいと思う。そのため、興味・関心の幅を広げ、得意なことや趣味を見つけてやすい。 イ 環境の援助資源 保護者は本児の気持を大切にし、愛情深く育てている。習い事なども含め、社会的経験を広げるように努めている。
⑤ 当面、何を目標としていますか？ ＜問題解決の方針＞	<ul style="list-style-type: none"> ・場の状況や相手の気持を理解して行動できるようにしたい。 ・他の人と自分との関係、自分の行為と結果との関係など関係付けて理解する力を付けて欲しい。 ・会話明瞭度を高めたい。 ・本児が自発的に指導時間や許容される範囲を理解して、学習の計画を立て活動すること、人との関係や場の理解、見通しを持った行動、自己統制力を身に付けられるように働きかける。 			
⑥ 誰が行いますか？ （通級、通常の学級、保護者、病院）	<ul style="list-style-type: none"> ・教科の学習の中で、本児が活躍できる場面の設定を工夫する（担任）。 ・時間と許容される活動の範囲という一定の枠組みの中で、活動の計画を立てて活動できるように促し、経験の幅を拡大するとともに、場に応じた表現の仕方や会話明瞭度を高める（通級）。 ・縄跳び、けんけんなど上下肢の協調性を高める活動を行う（病院）。 	<ul style="list-style-type: none"> ・同年齢の児童に対する攻撃的な行動を統制するため、環境の調整を行い、未然に望ましくない行動を防止する。また、攻撃的な行動の直前の行動を分析して、対応策を検討するとともに、望ましい行動を本児に意識させ賞賛することにより、他の児童と望ましいかかわり方ができるようにする（担任）。 	<ul style="list-style-type: none"> ・社会的な経験を広げ、社会的な事象の理解を促し、場に応じた行動や相手の気持の理解ができるように働きかける（保護者）。 	
実 施 期 間	3学期終了まで			

成果と課題 在籍学級担任、保護者、通級担当者、学校心理士（臨床心理士）、作業療法士、特殊教育センターの研究担当者がコンサルテーション会議を行い、それぞれの立場と観点から対象児の行動や内面の解釈を行い、実態と今後の取組について話し合い、助言し合うことができた。また、関係援助の視点から、本児の思いや望む活動を受容し、社会的な枠組みや校内体制を整えることにより、ワープロで通信を書くようになるなど、言語能力の向上が見られた。

課題としては、継続的にコンサルテーション会議を招集し、総合的な働きかけの評価を行い、指導の充実を図る必要がある。また、運営面では、関係者に対する要望を出し合う場ではなく、共に相手の立場に立って取組の方法を考えるというスタンスからの話し合いとなるように、通級担当者は見解を調整し、共通理解を図ることが重要である。また、援助者は被援助者のニーズを十分考慮し、情緒面の支援、資料提供などの情報面の支援、解決方略の事前の練習を行うなど指導やかかわりの力量を向上させる場を提供することや、指導の形成的評価を適時行い、状況の改善の状態に応じて、フォローアップのコンサルテーション会議を開催することが求められる。

ウ 言語障害教育におけるコンサルテーションの検討

(7) コンサルテーション会議

事例研究において、コンサルテーション会議を開催し、対象児にかかわる関係者の間で共通して課題として認識される問題状況と今後の取組について見解をまとめ、「援助チームシート」に整理し関係者が共有できるようにするとともに、対象児の指導、援助に当たる援助チームの援助計画を作成することができた。また、コンサルテーション会議は対象児にかかわる関係者の関係援助能力を向上させる契機ともなった。このことにより、在籍校、家庭、通級指導教室において、関係者が連携した一貫性のある指導、援助を行うことが可能になった。

a コンサルテーション会議と援助チームシート

事例研究の結果に基づいて、コンサルテーション会議の運営と援助チームシートに関する考え方を次のように整理した。

○コンサルテーション会議の運営

- ・司会者（通級担当者）は構成員の話し合いへの参加を促し、対等で自由な雰囲気話し合えるように留意するとともに、参加者やその言動を批判・非難することは禁止とする。
- ・参加者の意見を相互に評価し合わないようだが、司会は会議の意見が一定の一致点を見いだすように話し合いを誘導する。
- ・参加者には事前に援助チームシートを配布し、参加者がかかわる内容については記入して、論点を整理しておく。

○援助チームシート

- ・学校心理士が参加するコンサルテーションの過程は、「問題や課題の明確化→心理教育的アセスメント→目標の設定と解決方略の選択（目標と援助案の設定）→解決方略の実践とその評価」という流れを取ることが一般的である。援助チームシートの様式もこれに対応しているが、言語障害教育においては、保護者や在籍学級の担任が参加して、障害のある児童あるいは何らかの課題や悩みをもつ児童の実態や取組などについて関係者が話し合うため、参加者の意識と児童への接し方の影響を考慮して、①児童のよさ、②これまでの援助とその結果、③今後伸びて欲しいところ、④でだて、⑤当面の目標と問題解決の方針、⑥働きかけの内容と担当者の順に自由に考えを述べ合うことが望ましいと考える。

その際、参加者への要求を出し合うという場ではなく、児童の見方やかかわり方を学び合い、相手の立場に立って一緒にかかわり方のアイデアを出し合うという立場で会議を運営することが重要である。

このように、通級担当者が行うコンサルテーションは、異なる専門性や役割をもつ者同士の対等の関係を基盤とし、通常の学級の担任や保護者などに対して職業上あるいは役割上の課題遂行における問題解決を援助することである。

コンサルテーション
会議の構成員

b コンサルテーション会議の構成員

コンサルテーション会議の構成員としては、通級終了後における通常の学級や地域における生活を考慮して、通級担当者、通常の学級の担任、養護教諭、保護者、作業療法士、児童相談所職員、児童館指導員などが考えられる。コンサルテーション会議は年間1、2回前後の開催回数であり、初期の段階は保護者と通常の学級の担任、通級担当者が集まって行う。

参加者相互の援助的な関係の形成の状況と招集の必要に応じて、医療機関等の学校心理士、作業療法士、児童館の指導員など参加者を拡大していくことになる。しかし、会議開催の回数やステップは、対象児の状態及び開催の目的により様々な開催の仕方がある。

(イ) コンサルテーション機能の充実

コンサルテーション
機能の充実

援助チームによるチームアプローチを充実させる上では、援助チームがもつコンサルテーションの機能を双方向のコンサルテーションになるように推進することが重要である。

児童のもつよさが生きる指導を改善・充実させる上では、援助チームの活動が活性化されるような援助チームの機能の充実が必要となる。

そのためには、援助チームの構成員が相互の情緒的サポート、相互の情報交換及び指導、援助の方向性の共有を行い、構成員それぞれの見方や気づきを大切にして、児童への指導、援助を工夫するコンサルテーションを関係者相互間で行うことが重要である。

そして、会議参加者の関係は対等であり、誰もが援助者にもなり、被援助者にもなるという関係であることが必要である。

このような相互の援助的な関係を形成し、援助チーム内の双方向のコンサルテーションを活発化させることが、コンサルテーション機能の充実につながる。

なお、双方向のコンサルテーションの利点には、表2の事項が挙げられる。

表2 双方向のコンサルテーションの利点

- 児童を参加者それぞれの立場から見た結果を基に、児童を総合的に理解することができる。
- 通級担当者、通常の学級の担任、保護者は一方からの援助を受けるという固定的な役割を果たすことにならないので、主体的に援助案の検討に参加することにより、援助チームの援助機能が向上する。
- 援助者自身の児童生徒に対する見方や考え方が深まる。

連絡調整的
機能の発揮

(ウ) 連絡調整的機能の発揮

実態調査結果からも明らかなように、従来の関係者との連携は通級による指導の場での目標達成のために、通常の学級の担任や保護者に対して、現在の児童の状態の見方、接し方、福祉情報などの情報提供を行う他、悩みや不安を受け止め、共感し情緒的に援助することを行うことが多い。

このような連携においては、関係者の立場が補助的な存在になってしまったり、通級担当者の子どもの像や指導内容・方法が、通常の学級の担任や保護者あるいは医療関係者から見ると、児童の見方、指導の考え方にずれや戸惑いを生